

|| 編 || 集 || 後 || 記 ||

諸般の事情により前号に続き発刊が遅れたことをお詫びいたします。もともと本誌は「研究フォーラム」の誌名が示すとおり本学教職員、研究生、大学院生等の研究成果を発表する場として企画された（旭川医科大学紀要は発展的に解消）ものであります。この主旨が広く知られていれば自主的な投稿があるはずなのですが、現実にはそうではなく当たりをつけてそれぞれの方に執筆を編集委員会が御願している状況です。日頃よりインパクト・ファクターを気にされている先生方にとっては、本誌に投稿することは貴重な時間を費やすばかりでありメリットがないと考えられる恐れがあります。研究成果が点数として残るほうに投稿するのは極めて当然のことです。実際、本誌におけるオリジナルの投稿論文は減少の一途をたどっています。それに伴い依頼原稿その他が大部分を占めています。これは本来の方向とは少し違っているように思われますが、同様の問題は他の諸機関の類誌でもよくとりあげられる話題で、つまりは巷にあふれる学術雑誌に加え大学独自であえて持つ必要性ありやなしやということになります。今一度本誌の存在意義、方向性を確認する必要があると考えているのは筆者一人ではないと想像します。

さて、本号も投稿論文は少なく1編でした。学内共同研究者を含む学外からの投稿で唾液中の白血球に関する基礎的研究でした。

依頼論文は4編で薬剤部、健康科学、心理学、看護学の各講座よりいただきバリエーションに富んだものとなりました。

依頼稿（2編）ではチュートリアル教育について学生、教官双方からの意見・評価をもとに現状のチュートリアル教育の問題点を指摘し、より有効な教育システムになるための提案がなされ示唆に富むものとなっています。

エッセイは清水哲也元学長にお願いいたしました。変化の真っ只中にある国立大学とくに新設地方医科単科大学の進むべき方向を指し示されておられます。

最後に、お忙しい中原稿の執筆や査読を快くお引き受け下さった学内外の諸先生方ならびに製本に至るまで種々の苦勞をおかけした東洋印刷の皆様に熱く御礼申し上げます。

(S.K)

表紙解説

太陽系第4惑星として地球のすぐ外側を公転している火星は、古代より赤い輝きをもった星としてつづさに観測され親しまれてきました。特に6万年に一度の大接近、それに続く米国の火星探査車スピリットによる調査という最新のトピックに世界中が注目しています。火星の特徴を見ると、その重力は地球の3分の1、半径は2分の1、大気存在など、地球の性状と近いものがあります。さらに現在、スピリットにより「水の存在」を示唆するような報告もなされております。「水がある（あった）かもしれない」という事実は、「生命体がいる（いた）かもしれない」という夢に繋がり、興奮を覚えます。

惑星間旅行を描いたSF映画作品の一つとして、「2001年宇宙の旅」（アーサー・C・クラーク原作、スタンリー・キューブリック監督、1968年公開）という名作があります。HALという人工知能（コンピュータ）と飛行士たちの確執の果て、モノリス（一枚岩の石碑）を求めて惑星間をさまよう、という内容だったと記憶しています。難解な内容と共に、そのモノリスの意味するところは何かだろうか、知性（文明）？、真理？、異星人？、あるいは神？ この疑問は強烈な映像と共に今でも私たちの中でくすぶり続けているのではないのでしょうか。

そんな思いを込めながら火星の岩肌を描いていうち、いつの間にかそのモノリスが凜然と地中から現れてくるのでした。そして、いつの日にか遭遇するかもしれない、このような情景を見つめていると、「広大な宇宙の中の人類とは？」に対する様々な思いが巡るのでした。

整形外科学講座 今井 充